初の岐阜大学出身学長

岐阜大学 学長 森 秀樹

学長を含む大学執行部と
個々の大学構成員との間に
ギャップのない運営に取り組みながら、
岐阜大学は地方大学トップランナーを目指す。

「君はこの教室に残れ」と言われ、今日まで第一病理学教室へ。

私が岐阜大学医学部を卒業した昭和43年当時は、今とは随分と異なった時代でした。戦後アメリカによって導入されたインターン制度がこの年に廃止されています。制度は無くなったものの卒後研修体制は何も決まったものはなく、他の大学の学生と同様に私たちは卒業直後に国家試験をボイコットし（秋には受験）、大学病院や市中病院に研修の場を求め分散して行きました。私も東海ブロックインターン委員会の一人として、東海地区のいくつかの病院と受け入れの交渉にあたったものです。当時の学生は、「制度は自分たちの力でつくり直すものだ」という思い上がった考えを持っていましたが（青年医師連合）、ある意味ではポジティブな生き方をしていたように思います。

私は1年間の自主的研修後、岐阜大学医学部の第一病理学教室に大学院生として入局しました。特に強い意志を持って進路を選んだわけではありません。教室には教授・助教授の他に優秀な方々がおられ、吉田肉腫やcycasin（蘇鉄の実由来の発がん物質）の発がん性の研究をしておられました。しかしながら、私が大学院を終える頃には多くの先輩は臨床を含む他部門に転出してしまい、大学院を修了して3年も経つと私が医局長の立場で後輩を指導するようになっていたのです。その後、私も考えるところがあって教授に転出希望を出したところ、随分と嫌みを言われました。しかも、その1週間後の日曜日に教授から呼び出しを受け、
「君より俺のほうが先に転出することになったから、君はこの教室に残れ」と言われる始末です。以上が、今日に至る主たる経緯です。

岐阜大学を自分の家族のように大事にしていただきたい。

私は昭和62年に教室の教授になってから、一度入局したらいつまでも残りたい家族的な雰囲気のある教室づくりを目指してきました。おかげで多くの仲間を得ることができ、がんの化学予防や消化器発がんなどの病理学研究を一緒にやってくれました。現在、多くの後輩が国内外の大学の教授や准教授になっており、大学以外にも研究所や病院で病理学を研鑽してくれていることに無上の喜びを感じています。

振り返れば、私は2年間の米国留学を除けばいつも岐阜にいたことになります。つまり、長い間、岐阜大学から外の世界を見ていたのです。自分のことを“岐阜原人”と言っているのもこのためです。よく、外の世界から組織を見ることが重要だと言われ、外部評価はまさしくそれです。しかし、冷静に内から外を見ている者は、外から内を見る者の意に敏感であり、自分の組織の欠点の自覚も早いものと思っています。いずれにせよ、人一倍愛校心が強いのはこのような背景からです。

そこで私は、縁があって岐阜大学に関わることになった者はすべて、岐阜大学を自分の家族のように大事にしていただきたいと思います。もし、学生諸君に愛校心が薄いということがあれば、教員に主な責任があると言えるでしょう。岐阜大学で学んでいることの価値と喜びを与えていないことになります。

岐阜大学はどんどん新しいカラーをつくっていくことになる。

学長就任にあたって私は、地方大学トップランナーを目指すことを掲げました。

岐阜大学はすでに、教育のCOEと言われるGP（good practice）を6つ獲得し、新たに教職大学院をスタートさせる教育学部や全国共同利用型教育研究開発センターを有し、テュトーリアル教育を世に広めた医学部の教育体制や附属病院の医療情報システムはすでに全国トップクラスと考えています。連合大学院を3つ有しているのも岐阜大学だけです。このうち、中部地方で獣医学課程を唯一有している応用生物科学部の連合獣医学研究科と連合農学研究科には多くの留学生が学び、グローバルに活躍しています。さらに、公立大学である岐阜薬科大学との間で創設された連合創薬医療情報研究科は新しいタイプの連合大学院として注目されています。また、4つのプロジェクト型の研究センター（人獣感染防御研究センター・先端創薬研究センター・金型創成技術研究センター・未来型太陽光発電システム研究センター）は、いずれも現在我が国が直面している諸課題に向かうものばかりです。このような体制をさらに強固なものにしていきます。

岐阜大学は社会の変化に対応して自らを大きく変革するポテンシャルを有しており、どんどん新しいカラーをつくっていくことになるでしょう。そのために学長を含む大学執行部と個々の大学構成員との間にギャップのない運営が重要であると、私は強く感じているのです。